

青い星の国へ

小川未明

青空文庫

デパートの内部なは、いつも春はるのようでした。そこには、いろいろの香りかおがあり、いい音色ねいろがきかれ、そして、らんの花はななど咲さいていたからです。

いつも快活かいかつで、そして、また独りひとぼつちに自分じぶんを感じかんじた年子としこは、しばらく、柔やわらかな腰掛こしかけにからだを投なげて、うつとりと、波立なみだちかがやきつつある光景こうけいに見みとれて、夢心地ゆめごちでいました。

「このはなやかさが、いつまでつづくであろう。もう、あと二時じ間かん、三時間じかんたてば、ここにひとびといる人々ひとびとは、みんなどこかにか去さつて、しんとして暗くらくさびしくなつてしまふのだらう。」

こんな空想くうそうが、ふと頭あたまの中なかに、一片ぺんの雲くものごとく浮うかぶと、

きゆう
急にいたたまらないようにさびしくなりました。

そこを出て、明あかるい通とおりから、横道よこみちにそれますと、もう、あたりには、まつたく夜よるがきていました。その夜よも、日ひの短みじい冬ふゆですから、だいぶふけていたのであります。そして、急きゆうに、いままできこえなかった、遠とおくで鳴なる、汽笛きてきの音おとなどが耳みみにはいるのでした。

「まあ、青あおい、青あおい、星ほし！」

でんしや
電車の停てい留りゅう場じょうに向むかって、歩あるく途とち中ちゆうで、ふと天てん下じよ

上うの一個の星ほしを見みて、こういいました。その星ほしは、いつも、こんなに、青あおく光ひかつていたのであろうか。それとも、今こん夜やは、特とくに
さえて見みえるのだらうか。

彼女の、無意識のうちに、「私の生まれた、北国では、とても星の光が強く、青く見えてよ。」といった、若い上野先生（せんせい）の言葉が記憶に残（のこ）っていた。先生のことを思い出していたのであります。

すでに、彼女は、いくつかの停留場（ていりゆうじょう）を電車にも乗（の）らうとせず通（とお）りすごしていました。ものを考えるには、こうして暗（くら）い道を歩（みち）くのが適（てき）したばかりでなしに、せつかく、楽（たの）しい、かすかな空想（くうそう）の糸（いと）を混乱（こんらん）のために、切（き）つてしま（お）うのが惜（お）しかったのです。

先生（せんせい）は、年子（としこ）がゆく時間（じかん）になると、学校（がっこう）の裏門（うらもん）のところ（とこ）で、じっと一筋道（ひとすじみち）をながめて立（た）つていらつしやいました。秋（あき）の

ころには、そこに植うわっている桜さくらの木きが、黄色きいろになつて、はらはらと葉はがちりかかりました。そして、年とし子は、先せん生せいの姿すがたを見つけると、ご本ほんの赤あかいふろしき包づつみを打うち振ふるようになして駆かけ出したものです。

「あまり遅おそいから、どうなさつたのかと思おもつて待まつていたのよ。」
と、若わかい上うえ野の先せん生せいは、につこりなさいました。

「叔母おばさんのお使つかいで、どうもすみません。」と、年とし子こはいいました。窓まどから、あちらに遠とほくの森もりの頂いただき見みえるお教き室ようで、英えい語ごを先せん生せいから習ならつたのでした。

きけば、先せん生せいは、小ちいさい時じ分ぶんにお父とうさんをおおなくしになつて、お母かあさんの手てで育そだつたのでした。だから、この世よの中なかの苦く勞らうも知し

つていらつしやれば、また、どことなく、そのお姿すがたに、さびしいところがありました。

「私は、からだわたしが、そう強いほうではないし、それに故郷こきようは寒いんですから、帰りかえたくはないけれど、どうしても帰かえるようになるかもしれないのよ。」

ある日ひ、先生せんせいは、こんなことをおつしやいました。そのとき、年子としこは、どんなに驚おどろいたでしょう。それよりも、どんなに悲かなしかったでしょう。

「先生せんせい、お別れわかするのはいや。いつまでもこつちにいらしてね。」と、年子としこは、しぜんあつなみだに熱い涙あつなみだがわくのを覚おぼえました。見みると先生せんせいのお目めにも涙なみだが光ひかっていました。

「ええ、なりたけどここへもいきませんわ。」

こう先生せんせいは、おつしやいました。けれど、先生せんせいのお母さんかあとおとうとと、弟さんあとうととが、田舎いなかの町まちにいらして、先生せんせいのお帰かえりを待まっていられるのを、年子としこは先生せんせいから承うけたまわつたのでした。

また、先生せんせいのお母さんかあと、弟さんあとうとは、その町まちにあつた、教きょう會かい堂どうの番人ばんにんをなさつていることも知しつたのでした。

だが、ついにおそれた、その日ひがきました。せめてもの思おもいでにと、年子としこは、先生せんせいとお別わかれする前まえにいつしよに郊外こうがいを散歩さんぽしたのであります。

「先生せんせい、ここはどこでしょうか。」

知らない、文化住宅ぶんかじゆうたくのたくさんあるところへ出でたときに、

としこ
年子はこうたずねました。

「さあ、私もはじめてなところなの。どこだってかまいませんわ。こうして楽しくお話しながら歩いてあるんですもの。」

「ええ、もつと、もつと歩きましょうね、先生」

ふたりは、丘を下りかけていました。水のような空に、葉のな
い小枝が、美しく差し交じっていました。

「私が帰ったら、お休みにきつといらつしやいね。」と、先生
がおつしやいました。

年子は、あちらの、水色の空の下、だいたい色に見えてな
つかしいかなだが、先生のお国であろうと考えたから、

「きつと、先生におあいにまいります。」と、お約束をした

のです。すると、そのとき、先生は年子の手を堅くお握りなさ
 いました。

「たとえ、遠いたつて、ここから二筋の線路が私の町までつづ
 いているのよ。汽車にさえ乗れば、ひとりでにつれていってくれ
 るのですもの。」

そうおつしやつて、先生の黒いひとみは、同じだいたい色の
 空にとまったのでした。

流れるものは、水ばかりではありません。なつかしい上野先
 生がお国に帰られてから三年になります。その間に、おたより
 をいただいたとき、北の国の星の光が、青いということが重ねて
 書いてありました。そして、雪の凍る寒い静かな夜の、神秘的なこ

とが書いてありました。

青い星を見た刹那から、彼女を北へ北へとしきりに誘惑する目に見えない不思議な力がありました。

とうとう、二、三日の後でした。年子は、北へゆく汽車の中に、ただひとり窓に凭つて移り変わってゆく、冬枯れのさびしい景色に見とれている、自分を見いだしました。

東京を出るときには、にぎやかで、なんとなく明るく、美しい人たちもまじっていた車室の内は、遠く都をはなれるにしたらがって人数も減つて、急に暗くわびしく見えたのでした。そのとき、汽車は、山と山の間を深い谷に沿うて走っていたのです。

「まあ、山は真つ白だこと、ここから雪になるんだわ。」

としこ
 年子は、思わずこういつて目をみはりました。

「山を越してごらんさい。三尺も、四尺もありますさかい。お

まえさんは、どこから乗っていらしたの。」

黒い頭巾をかぶったおばあさんが、みかんをむいて食べながら

いいました。年子は、話しかけられて、はじめて注意しておば

あさんを見ました。なんだかあわれな人のようにも見え、また気

味悪いようにも感じられたのです。

「東京から乗ったのです。そして、つぎのつぎの、停車

場で下りますの。」

「着くと暗くなりますの。」

おばあさんは、それぎりだまってしまいました。雪の曠野を走

つて、ようやく、目的地もくてきちに着つきました。しかし、急きゆうに思おもいたつてきたので、通知つうちもしなかつたから、この小ちいさな寂さびしい停てい車しや場うに降おりても、そこに、上野先生うえのせんせいの姿すがたが見みいだし得えようはずがなかつたのです。

手てに、ケースを下さげて、不案内ふあんないの狭せま苦くるしい町まちの中なかへはりました。道みちも、屋根やねも、一面雪めゆきにおおわれていました。寒さむい風かぜが、つじに立たっている街燈がいとうをかすめて、どこからか、枯かれたささの葉はの鳴なる音おとなどが耳みみにはいりました。

どちらへ曲まがったらいいかわからなかつたので、しばらくたたずんで、きかかった人ひとに、教き会よう堂かいとうの在あり所かをたずねますと、すぐわかつて、そこから三、四丁ちようのところでありました。

雪ゆき催もよいの曇くもった空そらに、教きよう会かい堂どうのどがった三角かくけい形けいの屋や根ねは、黒くろく描えがき出だされていきました。そして、かたわらの小ちいさな家うちから、ちらちらと灯あかりがもれていきました。年とし子は、刹せつな那のちののちに展てん開かいする先せん生せいとの楽たのしき場ば面めんを想そう像ぞうして、胸むねをおどらしながら入はいつてゆきました。

先せん生せいのお母かあさんらしい人ひとが、夕ゆう飯はんの仕した度たくをしていられたらしいのが出でてこられました。そして、年とし子が、先せん生せいをたずねて、
 東とう京きようからきたということをおおききなさると、急きゆうにお言こと葉ばの調ち子ようしくもは曇くもりを帯おびたようだったが、

「それは、それは、よくいらしてくださいました。さあお上あがりなさいまし。」と、ちようど我わが子こが遠えん方ぽうから帰かえってきたよう

に、しんせつにしてくださいました。

年子は、先生の姿が見えないのを、もどかしがっているとお母さんは、おちついた態度で、静かに、先生は、もうこの世の人でないこと、なくなられてから、はや、半年あまりにもなること、そして、その節は、お知らせせずにはすまなかつたとお話しなされたのでした。

これをきくと、年子は、前後をわきまえず、そこに泣きくずれました。やがて、北国の夜はしんとしました。静かなのが、たちまちあらしに変わって、吹雪が雨戸を打つ音がしました。このとき、家の内では、こたつにあたりながら、年子は、先生のお母さんと、弟の勇ちゃん、三人で、いろいろお話しにふけてい

たのでした。

「スキーできる？」と、勇ちゃん（いさむ）がききました。

「ちつとばかり。」と、年子（としこ）は答（こた）えた。

「じゃ、明日（あした）、お姉（ねえ）さんのお墓（はか）へ、いつしよにゆこう。」と、勇（いさむ）

ちゃんが、いいました。

翌（よくじつ）日は、いいお天（てん）気（き）でした。ふたりは、町（まち）を距（へだ）たつた、林（はやし）の

下（した）にあつた寺（てら）の墓（ぼ）地（ち）へまいりました。墓（ぼ）地（ち）は雪（ゆき）に埋（う）まつていまし

たけれど、勇（いさむ）ちゃんは、木（き）に見（み）覚（おぼ）えがあつたので、この下（した）にお姉（ねえ）

さんが眠（ねむ）つていると教（おし）えたのでした。

「先生（せんせい）、わたしはお約（やく）束（そく）を守（まも）つておあいにまいりました。それ

だのに、先生（せんせい）は、もうおいでがないのです。私（わたし）は、ひとりぽつ

ちで、さびしく帰かえつてゆかなければなりません。」と、年とし子は目めを泣なきはらして、手てを合あわせました。勇いさむちちゃんは、ハーモニカを唇くちびるにあてて、姉ねえさんの好すきだった曲きよくを、北きた風かぜに向むかって鳴ならしていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「青《あお》い星《ほし》の国《くに》へ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い星の国へ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>